

今のぎん出しといふ油をつかふやうに用ひたるは、びん付油いできても、八十年前まではありける事、其比の書にあまた見へたり、此五味子を一名美軟石（美軟石ともいへり、中）ともいへり、又びんかづらともいへり、俳書二た車（正保三年、板雜舟撰）、春風に岸の柳のあらひ髪（付）、びんかづらは乳母が歳玉（中）、今の女中は、びん付の外に、すぎ油、ぎん出しの重寶あれば、五味葛の名は、百人一首に知るのみならん、享保十一年、不角撰、百入染（一名俳諧）とて、百人一首の句をたらいれたる句集の中に、三條右口臣を、花はいざ野郎帽子もさねかづら、是もさねかづらのはやりし一證とすべし、

〔甲子夜話七〕今ノ鬢ツケ油ト云モノモ、幼少ノ頃ハナク、蔓ヲ（蔓、所謂）水ニ漬シ、其汁ニテ結タリ、コノコト貴人計ニモナク、部屋方婢迄皆然リ、因貴上ニテ蔓豎鬢水入トテ有テ、蔓豎ニハ五味子ノ莖ヲ截テ立テ、鬢水入ニハ水ヲイレ、莖ヲ漬シテ櫛ヲ納レ、コレニテ鬢ヲ梳ルナリ、

〔北條五代記五〕關東昔侍形義異様なる事

諸侍の形義異様に候ひし、（中）鬢の毛のあひだをぬきすかし、皮肉の見ゆる程にして、髪をばび。なんせきにて、びんを高くつけあげ給へり、

〔狂言記一〕ゑぼしおり

大名いそげ、やい藤六、ゑぼしはまづおりにやつたか、えてゑぼしかみなど、いふ物は、ゆひつけぬ者は、ゑいはぬといふが、なにとゑた物であらふぞ、（中）藤六いやその御事で御ざりますか、此筒の中に、びん、なんせきが御ざります所でおまへのおつむりへつけねばいはれませぬ、（大名）ふん、ゑらなんだ、さあ、きてぬれ、（下）

〔好色一代男三〕戀の捨銀

そも、京は清く、少女の時より麗はしきを、貌は湯氣に蒸立て、（中）髪はさねかづらの、半に梳きなし、身は洗粉絶えさず、（下）